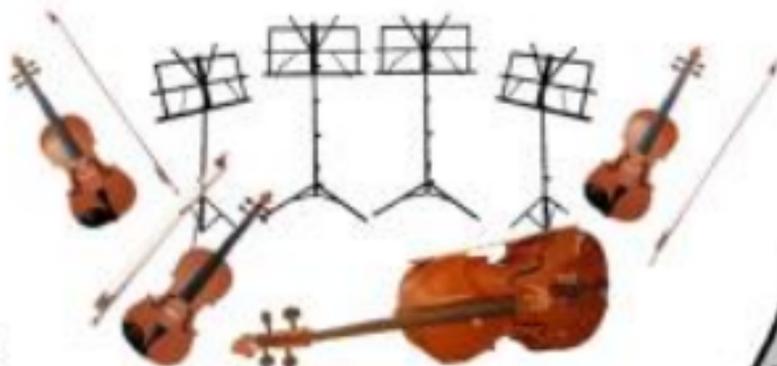


String
Fiction Series

9

疑問



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

疑問

山中與隆

目次

疑問

1

編者あとがき

89

疑問

山中與隆

「あーあ、この曲、猫も杓子も弾くけど、あんまり面白い曲じゃないよね」

テレビの画面には、頭がもじやもじやの若い外国人

チェリストが、若いグラマーなピアニストを伴奏にしたがえて、頭を振り、体を揺らし、ときに中空に視線をやりながら熱演している映像が流れている。

「わしは、この曲嫌いじゃないよ」

と一緒に見ていた一雄（五十八才、サラリーマン）。ときどき何もかも興味が無くなったというような無気力ないいかたをする孝之（六十四才、定年退職したもとサラリーマン）に少しムツとなつたみたいだ。

「そりや、ところどころにいい旋律はあるけど、全体としては退屈だよ。ピアノばかりやかましいところが多いし」

「このピアニスト誰？えらく胸元が目立つけど」

「チェリストの姉らしいよ」

「へー、そうなの。まあ退屈しちゃうところもあるにはあるけどね。そんなこといったら、まったく退屈しないクラシックの曲なんてある？」

「あるさ。ドヴォルザークの『オセロ』とか」

「あれは十五分くらいの短い曲だろ」

「うん、いや、やっぱ『オセロ』でも退屈なところあるかな」

「退屈と思うのは、聞き方に問題があるんじゃないの？」

「とにかく、これ止めていい？」

孝之はそういって、一雄の返事も待たずにテレビを

消してしまった。二人が見ていたのは放送中の番組ではなく、孝之がエアチエツクしたビデオである。

こんなことが時々あるにもかかわらず、懲りもせずに一雄はこうして孝之のところに音楽の話をした。り一緒に聞いたりするためやってくる。そういう孝之も音楽を聞く意欲が萎えているときばかりではない。それこそ何を聞いても心に響き、いい音楽だとか、素晴らしい音だねとひとりごとをいいながら

聞くこともある。

「あした練習に行くんだろ？」

「ああ」

この日はそれでお開きとなった。机の上にはすっきり冷めた飲みかけのコーヒーが置きっぱなしになっている。孝之はそれを台所に下げてから、ふたたびテレビの前に戻ってきた。しばらく何もせず座っていたが、やがてシーディーを取り出して装置にセ

ットした。トラックを選んでからテレビの前に正座して音楽が始まるのを待った。

曲は静かな管楽器の和音で始まった。管弦楽のための作品である。孝之が最近最も好きだと思っっているドヴォルザークの『オセロ』である。孝之は沈滞している今の自分の心に、この曲がどう響くか確かめてみたかったのだ。さつきは一雄に、この曲にも退屈なところはあるといったが、いま孝之は最後まで

で集中して聞くことができた。

中学生のころからクラシックが好きで聞き続け、大学生になると自ら楽器を始めてオーケストラにも入った。大学を出て一般の会社に入ってサラリーマン生活を始めたが、孝之の生活から音楽が無くなることはなかった。結婚して子供が出来ても、転勤があってもかならず地元のオーケストラに入り、そこ

で知り合つた仲間と室内楽も楽しんできた。孝之のこの五十年間は常に音楽と共にあつたといえる。しかしこのごろ音楽が面白くないと感ずることがよくあり、練習もしたくなくなることが多い。

次の日曜日、なかば習慣のように孝之はオーケストラの練習に出かけていった。

「よう」

練習場のエレベーターの前で出会った一雄が明るく声を掛けた。

「ああ」

孝之も気軽に返事した。

練習場には、すでにたくさんさんのメンバーが来ていて、先に来た人たちが椅子並べをしている。孝之たちも楽器のケースを隅のほうに置くと、急いで手伝った。

「きょうはこれくらいで大丈夫でしょう」
だれかがそういうと、椅子並べは終わった。日によ
って練習への出席状況は増減がある。「大丈夫」とい
った人は今日の出席数がある程度把握しているのだ
ろう。それぞれ事情があるのだろうが、比較的よく
休むメンバーがいるが、逆にめったに休まないメン
バーもいる。孝之は、音楽への興味が薄れることは
あるのに、理由もなく練習を休むことはなかった。

それは一雄も同様であつた。

それぞれ適当に自分の席に座り、各自持つてきた譜面台を立てそれに今日練習する譜面を乗せる。楽器を出して指ならしを始めるものが多く、練習場は急に喧しくなつて来た。特に打楽器の人たちは、自宅で練習できないためか、ここに来ると猛烈な勢いで練習する。練習指揮者はすでに来ていて、適当に時間を見計らつて、みんなの前に立つた。コンサー

トマスターが立ってチューニングをする。だがこれはかなり形式的なもので、各自デジタルのチューニングメーターを持っていて、始まる前に正確に自分の楽器の音を合わせている。アマチュアの場合、コンサートマスターから音をとって合わせるよりもその方が正確なのだ。そしていつものように練習指揮者の指示に従った練習が休憩を挟んで約三時間続く。「今日の練習どうだった？」

帰り際にそばによつてきた一雄が孝之に訊いた。

「どうつて？」

「いや、このまえお宅にいったとき、かなりテンションが下がっていたから」

「どうつて、普通だったのじゃない？」

「そんならいいけど」

それから三日後の夜、孝之のメールを受け取った

一雄はあわてて孝之のところへやってきた。メールの内容は

「オーケストラを辞めようと思っっている。一度話に来ないか？」

というものだった。孝之はやっぱりまだ尾を引いていると一雄は思った。

一雄が孝之の部屋に近づくと、かなりの音量でチャイコフスキーの第五交響曲が聞こえてきた。部屋

に入ると孝之はその前で正座して聞いていたが、一雄が来たので音量を下げ、

「おお、来てくれたか」

といった。オーケストラを辞める、などとメールに書いたわりには何事も無かったような明るい応対だと一雄は思った。しかも聞いていたのはいままさにオーケストラで練習中の曲である。しかもよく見ると孝之の前にはその曲のスコアまで開かれている。

「辞めるとかいつてたけど？」

「ああ、わしがときどき辞めるっていうのは、あんたも聞き慣れてるじやろうけど、今度はほんまに辞めたくなっているんよ」

「スコアなんか見て研究してるじやない？」

「これは、この前の練習で澤田のやつがあんまりセンスも何にもない練習するから確かめてたんよ。これカラヤン、ベルリン・フィルだけど、第二楽章の出

だしって、誰が弾いてもゾクゾクするところじゃない？」

「そうだけど、あのひとは練習指揮者としての役割は音程とリズムを合わせることと、みんなが弾けないところを何回も練習して多少でもましにして本番指揮者に渡すこととって割り切っているのよ。いつもそうじゃない？あんだだつて、練習指揮者がチャイコフスキーはこう弾くもんだとかなんとか知った風

に講釈するのを嫌ってたじゃないか」

「そうかも知れんけど、毎週毎週練習に行っても、あれじゃ音楽やってるっていう実感がないと思わん？」

「そりや、わしらみんながもう少し上手くなつて、練習指揮者も金出して誰かを連れてくりや、ちよつとは音楽らしさを楽しめる練習が出来るかも知れんけどさ」

「だから少し弾ける奴らを誘って、弦楽合奏団でも始めたなら多少は音楽的な満足が得られるんじゃないかと思つてさ」

「またそれか」

一雄は孝之から似たような話を何度も聞かされてくる。

「オーケストラの中から何人かの弦楽器奏者を誘うじやろ？それにオーケストラ以外の人も探して、

イ・ムジチくらいの十四、五人の編成でさ、木目の細かい練習をみっちりやったら良い音楽になると思わん？」

「そんな少人数になったら、一人ひとりの下手さともろに出て、とてもイ・ムジチのような響きになんかならなくて、この前も結論が出たんじゃなかったけ」
「イ・ムジチと同じなんていつてないよ」

「うーん」

一雄はうなるだけで返事のしようがなかった。

「だいたい、誰々を考えているのか知らんけど、あんたがオーケストラにいる奴らを誘って『はい、はい』と行って来るもんがいますか？」

「やってみんとわからんじやない。別にそいつらはオーケストラを辞めんでもいいわけだし」

「どうかなー」

「あんたは誘ったらやるじやろ？」

即答するには一雄にとつてもちよつと難しい質問だつた。オーケストラの弦楽器の弾けるメンバーばかり十人以上引き抜くとなると、オーケストラの存亡にも関わりかねない。オーケストラとその弦楽合奏団を掛け持ちでするとしても、参加した者にとつては練習日が増えたりして負担増となる。いまオーケストラには子持ちの主婦でかなり弾ける者も何人かいるし、小さい子供がいるお父さんもいて、彼ら

はどちらかという休みが多い。そのうえ土日がさらに練習でつぶれることに同意するものが何人もいるとはとても思えなかつた。

「おしんところは、子供も手を離れているし、やれんこともないけど、とても何人も集まるとは思えんよ」
「やってみんとわからんよ。案外音楽的な練習に飢えている者は多いかも知れんし」
孝之は同じ言葉を繰り返した。

いつのまにかチャイコフスキーの第五交響曲はおわっていた。

次の日曜日の練習に一雄も孝之も普段どおりに参加し、普段どおりに練習を終えて帰宅した。しかし、翌月曜日の夜一雄がメールチェックすると、孝之からの長文のメールが入っていた。それは先日話していた弦楽合奏団を立ち上げるから参加の意思がある

ものは自分までいつてきてほしいという内容で、よくみると一雄宛だけでなくオーケストラの弦楽器のメンバーのうちの十二人とオーケストラ以外の三人が宛名となっている。オーケストラ以外の三人というのは、一雄も知っている共通の友人たちであった。孝之は一雄が色よい返事をしないので独断で踏み切ったのである。メールを読む限りでは、孝之自身がオーケストラを辞めるとは読み取れなかった。しか

しこの提案は、音楽なんか詰まらんといつていた孝之にすれば、むしろ沈滞とは逆の精神状態であるといえるだろう。その点では一雄は孝之のためによるこばしいと考えるのだった。

一雄は翌日の夜、孝之の在宅を確かめてから訪ねて来た。一雄が顔を見せると、孝之はいきなり、

「おい、五人引つかかったぞ」

と大きな声を出した。参加を表明した人に対して『引

つかかった』とはいささか失礼ないいかただが、これが孝之のものいいかたで他意はない。

「誰々だね？」

一雄もおおいに関心があつた。自分はまだ返事をしていない。

孝之はすでに開いてあつたメールを見せた。コンサートマスターを含む四人のオーケストラのメンバーからの、むしろ期待を滲ませた返事である。その

中には子育て中の主婦も入っている。それとオーケストラ外の友人が一人である。このオーケストラ外の友人は、ついに待望のときが来たとばかりの歓迎振りである。「やってみないとわからん」

といていた孝之の言葉が当たっていたように見えると一雄も認めた。

「まだ五人だけだね。わしで六人。あんだ・・・もちろんやるじやろ？・・・それで七人。半分という

ことね。でも二日で七人は悪くないよね」

「楽器は・・・バイオリンが三人、ビオラがあんたを入れて三人、コントラバスが一人か。あと欲しいのはバイオリンが三、四人とチェロが二、三人ということか。チェロ三人が厳しくない？」

一雄も乗り気になってきている。ちゃんと自分をコントラバスの一人として数えている。

「難しいのは、チェロよりもギヤラ無しでやってく

れる優れた指導者だよね。団員になってくれれば最高だけどね」

「そうだね」

翌日すぐに孝之は、前回メールしたがまだ返事のない人たちに当てて、参加を表明した楽器と人数を書いて、参加表明を促すメールを出した。それにはバイオリンがあと四人、チェロが三人必要で、それ

以外は定員に達したと付け加えた。『締め切り迫る』
といった感じである。

土曜日までにさらにバイオリン二人、チェロ一人
の参加表明があり、孝之はとりあえずスタートでき
る人数が揃ったと考えた。

日曜日、孝之が練習場に行くと、小さな声で合奏
団のことが囁かれていた。孝之は練習が始まる前に
指揮者に私的なことだがと断って、合奏団立ち上げ

のことをみんなに発表した。噂だけが一人歩きしてしまわないようにとの配慮であつた。そのとき孝之は更なる参加要望については慎重に言葉を選んだ。

これまでは、あくまで孝之の考えた参加条件に合致したものを一本釣りしてきているので、ここで水準に達しないと思うものが参加したいといい出したら困るからである。

まずインスペクターのようなことをしている男が、

「それは、オーケストラの練習には差し障らないのですよね」

と質問した。孝之は、もちろんそのつもりだと答え
た。

しかし孝之の心配していた質問が、バイオリンを
はじめて間もない中年の主婦からだされた。

「そんな面白そうなのができるのだったら、ぜひ参
加したいのですけど、いまここで申し込んでもいい

の？」

これには孝之だけでなく、ある水準のものに声が掛かったと思っっている参加表明組みの中にも困惑が走った。まさかオーケストラみんなの前で、『あなたは水準以下だからだめです』とはいいいにくい。呼びかけ人である孝之がどうさばくのか、みんな注目した。件の中年の主婦だけでなく、彼女と同様に呼びかけのメールが来なかった人たちも注目していることを

孝之はひしひしと感じた。それだけでなく、メールが来た人たちですでに参加の意向を返事した人もそうでない人も成り行きをじっと見守っている。孝之はその練習場に流れた一種の緊張感ですっかり返事に窮してしまった。

そのとき後ろの方でコントラバスにつかまるようにして立っていた一雄がふいに発言しだした。

「このことはオーケストラの活動ということではな

いので、ここで時間を割いて話し合ったりするのはふさわしくないと 생각합니다。それで吉野さんのご質問に対しては、今晚個人的にメールなどでお話しすることにしたと思います。がよろしいでしょうか？」

一雄は、孝之が返事に困っているのをみて助け舟を出したのだ。もともと孝之が勝手に何人にもメールを出したのであって、一雄と共同の発起人として始

めたわけではない。しかしこの場は、孝之としては大いに助かった。それだけでなく、一雄自らがこれから一緒にやっけていくことを宣言してくれたわけだから孝之にとつてはこれほど嬉しいことはなかつた。孝之は持つべきものは友人だと思つた。

練習が終わつてぞろぞろと団員たちが帰るとき、吉野と一緒に歩いている人たちに何ごとか興奮気味に話しかけているのを、少し離れた後ろを歩く孝之

は見た。話している内容は聞き取れなかったが、きつとさつきの話に違いないと思つた。

その夜さつきそく孝之のところに一雄がやってきた。一雄は開口一番、

「勝手に共同発起人みたいないかたして悪かつたかな？」

と、いって孝之の反応を確かめた。

「とんでもない。ありがたかったですよ。あらためてよろしくお願いします」

こうして二人の合奏団のこれからについての希望に満ちた話し合いが始まったのだった。しかし、まずは練習場で発言した主婦、吉野への対応が議題である。彼女がたとえ水準以下としても、一人くらいならたいして問題にならないだろう。しかし『吉野さんが入れるのなら私だって』と行って次々に入団

希望者がでてきたらやつかいである。ある程度技術があつて、音楽的な理解もありそうなメンバーを集めて質の高い合奏を目指すという孝之のもくろみは崩れてしまふ。

技術レベルが高くななくてもやる気がある人は戦力といえるのではないか、逆に上手くてもそのような合奏活動に協力的でないものは邪魔な場合だつて有りうるなどと二人の議論は堂々巡りしながら続いた

が、結局は吉野の入団を断ろうという結論になった。今晚メイルをすることになっている。どういつて断るのか、それがまたなかなか決まらない。『合奏団にはある程度以上のうまい者だけ入ってもらおうつもりであるから、あなたはそれには当てはまらない』とはいいいにくい。だいたいその上手いという者のなかには孝之自身入っているのである。孝之はビオラを弾いているがトップではないし、オーケストラにいる

六人のビオラの中では中くらいのレベルだろうか。その孝之が、他のオーケストラメンバーに対して、上手いとか下手だといえるものではない。あれこれ話していたが、一雄が、

「あなたはビオラの技術では、オーケストラの中にもっと上手い者はいるけど、音楽への造詣は誰よりも深いし、そもそもこのような企画を始めようとする 것과自体凄いなんだから、遠慮することはないな

いよ」

といつてくれたので、吉野に返事をする決心がついた。

『今回は、実験的に私たちが思うような形でやってみたいので、今回は関心を持っていただいて大変ありがたいのですが、申し訳ありませんが吉野さんの申し出を辞退させていただきたいと思えます。悪しからずご了承ください』

こう書いてから一雄に見せた。一読した一雄は、

『『今回』は一回書けばいいから二番目のは消した
ら』

といっただけで、

「これでいいんじゃない。どつちにしても断ることにはかわりないのだから、佐藤さんが喜ぶような書き方はできないよ」

とつけたした。孝之は、一雄のいうとおりに二つ目

の『今回』を消してから送信した。

そのとき新しいメールが入っていた。孝之が誘いのメールをだしていた相手で、チエロの友人からだった。もちろん参加の表明であつた。彼は自分も参加したいというだけでなく、いきなり差し出がましといは思うがと断つてから、新しく出来る合奏団の名前は差し支えなかつたらぜひ『アンサンブル≪水≫』にしてほしいというのだ。それには理由が長々と書

かれています。『自分は、なにか四重奏団か合奏団を始めることがあつたらこの名前を付けたいと思つていました。水は湖でも海でも川でもいいのだが、時には鏡のように静かであり、あるときはたけり狂う、またあるときはとうとうと流れる大河ともなる。その色にしても空の色、雲や周りの木々の色を映してさまざまに変化するし、底知れぬ深さを湛えた色から、さざ波だった表面や白波やうねりなど千差万別であ

る。音楽はその中から生まれそこに帰っていく。水は音楽にとって母の羊水のようなものだと思います』というのである。一雄はこれを読んで、ここままで思い入れを示してくれるのだったら、その名前の良し悪しはともかくとして、それを採用したらどうかといったので、採用することにした。そもそも自分が高上げたことになるかもしれない団体のために考えていた名前を、この楽団につけてもらいたい

というのだから尊重しないわけには行かない。実は孝之自身は、『アンサンブル』《水》』というのはいさぎつぽいと思つたのだが、ほかに適当な名前が頭にあつたわけではないので一雄にしたがつた。合奏団の名前も今日の大きな議題だつたのだが、はからずもこのような形で、おそらく二人が思いつくはずもないような名前がもたらされたのだつた。

この日はほかにもスタートしたら最初に練習した

い曲、練習会場を何処にするか、オーケストラの練習と重複しない練習日や練習頻度、演奏会のことなどアイデアに関して豊富な二人のこと、たくさん
の考えがまとまりもなく飛び交った。ただ重要なことなのがいい案が出なかったのは、ギヤラなしでやってくれる良い指導者についてだった。これは保留にして、深夜になったのでお開きとした。

孝之が翌日メールを開くと、すでに参加を表明していたあるバイオリンの女性から、参加を取りやめるというメールが入っていた。理由は特に書かれておらず、ただ『個人的な事情で、参加しても続けられそうにないので』となっていた。最初に孝之が呼びかけた人でまだ何の返事もない人が何人もいたが、彼らからの返事はないままであつた。それどころか、さらにその翌日になって参加表明していたバイオリ

ンとビオラの女性から参加取り消しのメールが届いた。この二人も理由らしい理由は書いていなかった。孝之は、辞退した三人とも吉野の件と何らかのかかわりがあるような予感がした。吉野が参加しないように働きかけているのだろうか。あるいは、そうではなくて自分たち一部のものだけに誘いがあつたことと後ろめたさがあるのだろうか。孝之は面倒なことになってきたと思つた。

一雄と相談したかったが、その日一雄は図書館の何とかという会に出ていて夜の帰りが遅い。孝之は十一時ころになってから電話した。メールで状況を説明するのは面倒だったせいもある。一雄もすぐには良い考えが出ないらしく、あした休みだから午前中に行くといつて電話を切った。

孝之は寢床に入ってからもどう対応したらいいのかあれこれ頭の中を駆け巡ってなかなか眠れなかつ

た。吉野や参加を取りやめるといつてきた人たちの顔が次々と浮かんでは消えるだけで、解決策など何も浮かんでこない。そんなこともあつてか、発足しようとしているにもかかわらず、合奏団が実現するイメージがどうしても浮かんでこなかった。

次の日、昼から用事があるからといつて一雄は九時ころにはもうやつてきた。

「やっぱり、オーケストラの練習のときにいきなり

発表したのがまずかったのじゃないかね」

一雄もいろいろ考えたようだ。

「いずれにしてもすんだことは戻らんのだから收拾策を考えようや」

「辞めるといってきた三人って、特に仲がいいというわけじゃないよね。あまり一緒に話したりしてるところろ見たことないもの」

「それで？」

一雄がなんとなくイラついた調子でいった。

「だからつまり申し合わせたわけじゃないってことよ。だから参加を取り消すっていつてるおばさんたちを個別に、もういちど参加するように説得したらどうじゃろー」

「もう一度メールする？電話する？訪ねていつて話します？」

「なんか今日はやけにつっけんどんだね」

「そんなことないさ。今さらいつてもしようがないけど、ことを運ぶのに周到さがなかつたといえるのじゃない？」

「わしが勝手に先走つたからだというんだね？」

「まあ、すんだことは戻らんのだから、先を考えよう。別に悲惨なことが起こつたわけじゃないから、深刻になる必要はないさ」

あれこれ話しているときに電話が掛かってきた。

最初にメールで参加表明を翻してきた佐藤という主婦だった。

「せつかくお誘いいただいたのに失礼なことをいってすみません。実は吉野さんが私とかいろいろな人に電話して、誘われたかどうか訊きまわっているよ。うなのです。それで私が誘われたと答えたら、ああゆうことは裏交渉でやらずに、ガラス張りで公平にすべきじゃないかっておっしやるのです。そしてそ

のような陰湿な誘いに乗った私は問題だから断りなさいって。私はあの練習のときの雰囲気で、何となくまずいと思ったのですぐに辞退のメールを出しましたが、吉野さんにはそのことはいわずに、ただ考えさせてもらおうとだけいいましたの。ちよつとまずいことになってきたと思ひまして、お電話しましたの」

「それは、わざわざありがとうございます」

孝之がさらに言葉を継ごうとすると、佐藤が孝之の言葉を遮ってしやべりだした。

「それでね、わたし牟田さんともおはなししたんですが・・・牟田さんもお誘いになりましたよね・・・弦楽合奏団を作るのはとてもいいことだと思うんですよね。それで、オーケストラの中の一部門といいですか、下部組織というんですか、そういう風な形で作られたらいいんじゃないかって。すみません、

勝手なことべらべらしやべってしまつて。一度考えてみてくださいますか？」

たしかに勝手なことを一方的にしやべって佐藤は電話を切つた。電話の内容をかいつまんで一雄にはなすと、一雄はしばらく考えていたが、

「要するに自分たちだけが引き抜かれるようにして合奏団の活動を始めるのが嫌ということらしいね。おばさんたちの考えそうなことだ」

「めんどろくさくなつてきたね」

「そうだな」

二人の新しい企画に対する意欲に冷水が掛けられたような気持ちになった。その日は何の結論も出ないまま、一雄は予定の時間になつて帰つていった。

その二時間くらいしたときであつた。

孝之が部屋にいと、ドーンと激しく突き上げら

れる衝撃に続いてゆさゆさと部屋中が揺れ始めた。揺れはおさまる気配もなくさらに激しさを増していく。部屋中の壁際に立っているものは倒れ、倒れた棚のガラス戸が割れる。机や台の上のものは猛烈な勢いで横滑りして壁にぶつかったと思つたら、今度は逆走して床に落ちたりした。その間孝之は何も出れず座つたまま目目の前の机に両手でつかまつた状態で状況に任せるしかなかつた。幸いに倒れたも

のが孝之に当たるようなことはなかつたので孝之自身は無傷であつた。何分間揺れていたのだろうか。揺れはどんどん激しさを増すように思われて、孝之は恐怖感に襲われて動けなかつたのだ。揺れが止つてしばらくしてまたゴゴンと音がしたのでギョツとした。また来たと思つたが、ドアの外から家内の声がした。家内は部屋に入つてこようとしてドアが開かないようだ。内開きのドアの前に本棚が倒れ掛

かっている。孝之は立って行ってそれを起こした。中の本は大部分が床に散乱して意外に軽い。しかし不用意にも本棚の扉のガラスが割れて散乱していることに注意を払わなかった。孝之は開いたドアから入ろうとした家内を

「ガラス！」

と叫んで押しとどめた。自分も足の裏を切ったようだ。家内はいそいで玄関からスリッパを持ってきた。

孝之は家内も無傷らしいので安心した。孝之の足の傷はたいしたことなかった。二人ははじめ孝之が座っていたあたりで黙ったままだった。

そのときまたゆらゆらと揺れて、窓際の机にあった何か床に落ちた。テレビを見ようにも、低い台の上にあったテレビは倒れて床に落ちている。ディスプレイのガラスも割れているようだ。二人はあらためて部屋を見回した。窓ガラスは割れていない。

孝之は窓のそばに行つて外の様子を見ようとした。この部屋の窓はすりガラスになつてゐる。その窓を開けようとしたが開かない。窓枠がひずんだのかもしれない。

「おまえは揺れたとき何処にいたのだ？」

「台所」

「どうだった？」

「食器から何かからめちやめちや。でもすぐにガスを

止めてテーブルの下にもぐったの。ここに来るときちよつと見たただけだけど、ほかの部屋もかなりやられてるみたい」

そうしてじつとしているとき、孝之はつい二時間前にここから出て行った一雄のことを思った。午後用事があるといっていたが、何処に何をしにいったのか聞いていない。手元にあつた携帯を掛けてみたがまったくつながらない。

二人が、ようやく気を取り直して家の中を見回つたのは、一時間ほども呆然としていたあとだった。

広報車が避難所に避難するようにアナウンスしてまわっているのが聞こえてきた。避難所は近くの小学校らしい。近いところだし、このマンションの部屋には何か必要なものがあれば取りにこられると思つて、手回り品だけを持って小学校に出かけていった。

途中崩れかかった家、屋根瓦がすっかり落ちてい

る家、斜めになつてゐる四階建てくらいのビルもある。電柱や看板も倒れたり散乱したりしている。右往左往する人たち。頭から血を流している人もいる。小学校の方に道を曲がつたとき、そのはるか向こうの方に黒煙があがつているのが見えた。火災が発生したらしい。一雄の家はその方角にある。孝之は胸騒ぎがした。

小学校についてからも携帯電話をしてみたが、相

変わらずまったくつながらなかつた。

結局電気、ガス、水道はとまりマンションの住民はもちろん、近所の人たちも自宅での生活は困難で、避難所生活を余儀なくされた。避難所となつた小学校も、電気も水道も止つていて、避難生活は難儀を極めた。前立腺肥大を患っている孝之にとつてトイレの問題は深刻であつた。ただ暖房の要る季節でな

かつたことが幸いであつた。そのなかでも避難者同士の当番制や、コミュニケーションの支援によつて三日と耐えられそうにないと思われた避難所生活は、いつの間にか一週間過ぎ、十日が過ぎていった。その間の、市の職員、地区の公民館職員などが、おそらく自らも家族や住まいなど被害を受けていただろうに献身的に避難所や地域のことに関心を投じている姿には胸を打たれる思ひであつた。水や食料品も配

られたが、その量は極端に少なかつた。災害時のニ
ユースなどで見たことのある炊き出しなどはまった
くなかつた。市の職員の説明では、災害の規模は想
像をはるかに超えるもので、周辺地域も他を救援を
する状態ではない上、遠隔地からの救援も道路が寸
断されていて災害地域に入つて来られないのだそう
だ。

それでも電気工事会社の人たちの努力で、避難所

には五日後に電気が通った。夜の明かりとテレビが人々をどれだけ安堵させたかは想像以上だった。地震後初めて見るテレビでは、ひっきりなしに被害状況が流されている。この地震で被害が及んだ範囲はとてつもなく広く、被災者は数十万人規模であるらしい。死傷者の数も刻々と確認されているが数万人に達するのではないかといっている。

孝之は同じ避難所に、同じ町内に住んでいてオーケストラでオーボエを吹いている森山という男がいるのではないかと探したが目に留まらなかつた。避難生活が一週間位したとき、見覚えのない婦人が近づいてきて、孝之にオーケストラの方ではないかと訊く。その婦人は森山の奥さんだつた。森山は地震発生するとき勤務先の工場内にいて装置が倒れてきて下敷きになつて命を落としたのだそうだ。そういつ

たとき婦人は大粒の涙をはらはらと落としたが、それ以上取り乱すこともなく、主人の生前はオーケストラでお世話になりましたと挨拶された。

二、三日して家内が森山の奥さんのところに話しに行った。奥さんは、オーケストラの演奏会にはご主人が聞きに来いというので仕方なく聞きに行っていたのだが、毎回のことだし正直少し面倒だと思っていた。それに家で練習するオーボエの音は甲高く

てやかましかつた。でもこうして音楽どころじやなくなつてみると、あんなオーボエでも音楽があつてほしいと思うとしみじみと話したそうだ。

この話を聞いた孝之は、地震の直前に一雄と企画し、何となく障害に乗り上げそうになっていた合奏団は、こうなつた今こそ必要なのかもしれないと思つた。孝之はマンションに帰つて、ごつた返しになつてゐる中から、楽器がどうなつてゐるか探した。

孝之のビオラのケースは倒れ掛かった棚の足元で無事な姿で転がっていた。引っ張り出してケースを開けると、楽器本体も無事のようにだ。孝之はおそるおそる音を出してみた、大丈夫だ。家が焼けてすべてを失ったという話を避難所でたくさん聞いていたので、自分はなんと幸運だったのかと思った。孝之は楽器をケースに戻すと、余震が来てさらに何か倒れてもつぶされないうようなところにそれを置いた。

次に孝之は楽譜を調べてみた。こちらは散乱して
るだけで使用できる状態であることがすぐに確認で
きた。それだけ確かめると、孝之は妻に頼まれたト
イレットペーパーやタオルなどを袋につめて避難所
に戻った。

十日目になつても一雄から何の連絡もないし、こ
ちらからも連絡できないままだ。私は歩いて彼の自

宅があるほうに行ってみることにした。一雄の家までは、車だと数分だが、歩きだと小一時間かかる。しかし、このときは家が倒れて道路がふさがつていたり、橋が落ちていたりで遠回りしながらやつと一雄の家がある辺りについたときには三時間近く掛かっていた。歩いたことで、被害の物凄さがよくわかった。そして、一雄の家があつた辺り一帯はすっかり焼け焦げた家ばかりになっている。

焼けた自分の家だろうか呆然として眺めている人たちがいる。その一人に声を掛けた。その人の話によると、自分は何とか外に逃げ出したが、火が出たとき崩れた家の中から出られずに亡くなった人もかなりいたという。消防車も来るには来たが火災現場に思うように近づけず、消火栓も勝手に水を噴出しているような状態で、ほとんど消火らしい消火は出来なかつたらしい。一雄の家のことを知らないか訊

くと、その人はたまたま一雄の奥さんが焼死したことを知っていた。しかし一雄のことはわからないと
いった。奥さんが運ばれたという遺体安置所を教え
てくれたので、私は行ってみた。二十体くらいの遺
体がすでに棺に入れられて並べられている。そこに
はさらに新たな遺体が運び込まれているようだった。
それぞれの棺には、墨で黒々と名前が書かれてい
る。一雄の奥さんの名前もあつた。遺体を見せても

らったが、焼け焦げていて見慣れた奥さんなのかどうかさえわからなかった。おそらくあの家で亡くなっていたので身元を判定したのだらう。

ここにある遺体はすべて身元がはっきりしているらしい。そしてここにあるのはまだ引き取り手が無い遺体らしい。引き取りたくても自らも被災して引き取れない人たちも大勢いることだらう。

一雄はあのととき我が家から出かけたまま、ここ

に帰ってきていないということになる。出先のどこかで怪我をして病院に收容されているのかもしれない。あるいは……孝之はビオラや楽譜の無事を確かめていた自分ののん気さを恥じた。

その晩私たち夫婦は、涙さえ出ないほどの深い悲しみと喪失感に襲われて、まんじりともせず、体育館の天井を眺めていた。

二週間後に私は家内を伴って、ふたたび一雄の奥さんが安置されている遺体安置所に歩いて行つた。奥さんの遺体はそこにはなくなつていた。係りの人に訊くと、その後一雄の遺体がここに戻つてきたが、息子さんという人が引き取りに来たということだつた。息子さんが九州にいるということは聞いていたが、息子さんの名前もその住所も聞いていない。係りの人がそれらを教えてくれた。避難所に戻つてか

ら、ようやく開通した公衆電話で教えられたところに電話することができた。

一ヶ月が過ぎたころ、孝之は仲間を探して音楽をしようと考え始めていた。それから一ヶ月かけて集まったのはバイオリン三人、ビオラ一人、コントラバス一人の五人だけだった。いずれもオーケストラ

のメンバーだ。バイオリンの三人のうち二人は例の参加表明した主婦たちで、そのうち一人はその後辞退した佐藤だった。今回は誰も地震前のことに触れなかった。そして避難所の音楽室を借りて、不完全な編成で、しばらく楽器を持たなかった素人たちの不完全な演奏ではあったがモーツァルトの曲を発表した。避難所の人たちを中心に音楽室に入りきらないほどの人たちが聞きに来た。会場は物音一つ立て

るものもなく、みんな何を思いながら音楽に耳を傾けていた。聞いている人の中には目頭をぬぐう者もいて、それを見た演奏者も胸を詰まらせるのだつた。

(完)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

- 1 弦楽四重奏団 a
- 2 弦楽四重奏団 b
- 3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 09

疑問

2022年11月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID：2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID：1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID：105365

・タイトル：譜面台

素材のID：105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID：3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
